

# 女子大生における心理学的タイプと精神的健康，主観的適応との関連

佐藤 淳 一

(武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科)

## Relations among Jung's psychological types, mental health and subjective adjustment for undergraduate female students

Junichi SATO

*Department of Psychology and Social Welfare, School of Letters  
Mukogawa Women's University*

### Abstract

The relations among Jung's psychological types, mental health, and subjective adjustment for undergraduate female students were investigated. Undergraduate female students ( $n = 256$ ) completed the Jung Psychological Types Scale (JPTS) and General Health Questionnaire 28 (GHQ 28), whereas another female students ( $n = 240$ ) completed JPTS and the subjective adjustment scale (Among 240 students, 153 students completed all scales). Results indicated that "anxiety and sleeplessness" and "tendency of depression" scores on the GHQ 28 were significantly lower in introverted feeling types than extraverted feeling types. Total scores on the subjective adjustment scale were significantly lower in introverted feeling or sensation types than extraverted feeling or intuition types. These results suggest that the introverted feeling types of Jung's typology tend to be associated with relatively low levels of mental health and adaptation.

### 問題と目的

大学生は大学時代にさまざまな経験を通して、自分らしさや自分とはどのような人間かについて考え、社会に出るための準備期間として位置づけられる。そのため、大学生の時期は自分という人間を見つめ直しアイデンティティを確立していく時期と言える。疾風怒涛の時期と呼ばれるように、そもそも葛藤や混乱を経ながら成長し、自己形成するものと従来は考えられてきた。

ところが近年は、葛藤や混乱を経て自己形成に至る前の段階で、学生生活自体に不適応を起こすことが深刻な話題となっている。たとえば、谷島(2005)の調査によると、約半数近くの大学生が入学後に一度は大学を辞めたいと思ったことがあると回答し、その理由として、「目的意識・学力のズレ」、「学校・授業への不満」、「人間関係」などを挙げている。葛藤や混乱を通して自己形成するのではなく、葛藤や混乱を避けるために大学生活から遠ざかる様子がうかがえる。

かつて大学生の長期欠席はとくべつな事情を除いて、ある意味で学生本人の意思と捉えられる風潮があった。しかし現在、不登校の問題は大学においても大きな問題として取りあげられている(小柳, 2014)。大学生活に馴染めず、周囲に疎外感を感じ、不登校に至るプロセスが指摘されているが(太田・甲村・児嶋, 2008)、問題の背景には以前と比べて多くの人にとって大学進学が可能となり、将来の目標や目的をもたずに入学する時代となったことも遠因として挙げられる。

また、大学生活の適応面だけでなく、大学生自身の精神的健康面も悪化しているという報告もある(平

野, 2005)。一般的に不適応状態が続いた後に精神症状を示すようになるが、なかには環境に表面上適応していても精神的に不健康に陥る場合もあれば、逆に不適応の状態であっても精神的健康を維持している場合もありうる(北村, 1965)。そのため、大学適応と精神的健康は分けて捉える必要がある。

近年、精神障害の神経生物学的側面が注目され、特定の生物学的、遺伝学的要因から診断を捉えようとする試みが研究の主流となり、以前のように精神障害の背景にあるパーソナリティを扱うことは減ってきている。しかし、いくつかの研究で単極性の双うつ病などの感情の基底をなすパーソナリティが明らかになっている(Heerlein, Richiter, Gonzalez & Santander, 1998)。このパーソナリティ特徴のなかでも、内向性は単極性の双うつ病の中核的なパーソナリティであることが指摘されている(Janowsky, 2001)。

向性の点から精神的健康との関連を調査したものとして、EysenckのMPIとGHQ28を用いた検討では、精神的に不健康は神経症傾向と正の有意な相関を示すのに対し、社会的外向性とは無相関であった(中川・大坊, 1985)。また、5因子性格検査とGHQを用いた検討では、外向性はうつ傾向と弱い負の関連を示すが、精神的健康と関連は認められなかった(夏野, 1998)。こうした結果から、向性は活動性やエネルギーの水準を示す概念であり、精神的健康とは独立したものと捉えられている。

ただし、このような調査の多くは特性論的アプローチに終始しているため、パーソナリティの全体像を把握することが重要な臨床場面ではモザイク的、断片的な理解に留まってしまうおそれがある(河合, 1986)。そこで本稿は、類型論的アプローチの一つである心理学的タイプ Psychologische Typen (以下、タイプ論と略; Jung, 1921)の観点からパーソナリティ特性を捉えることとする。

タイプ論とは、外向(extraversion)、内向(introversion)と呼ばれる一般態度(general attitude)に、思考(thinking)、感情(feeling)、感覚(sensation)、直観(intuition)と呼ばれる心的機能(psychological function)を加え、それぞれの組み合わせによる8つの心理学的タイプからなる類型論のことである。一般的態度は心的エネルギーの基本的な方向性を規定し、心的機能は現実世界と関わる際にどのように適応するかを決定する。心的機能のうち、感覚と直観は心理的内容を取り入れる方法として知覚を用いるので知覚機能とも呼ばれ、思考と感情は知覚機能を通して取り入れられた内容に対して評価したり意味を与えたりして判断を行うので判断機能とも呼ばれる。これらの機能のうち、もっとも意識に分化しているものを優越機能、次に分化しているものを補助機能、逆に無意識的で未分化なものを劣等機能と呼ぶ。この場合、優越機能と劣等機能には相反する対極性が働きつつ、無意識的には相補性が働くとされている。

この2つの一般態度と4つの心的機能の組み合わせにより、外向思考(Extraverted Thinking: ETと略)タイプ、内向思考(Introverted Thinking: ITと略)タイプ、外向感情(Extraverted Feeling: EFと略)タイプ、内向感情(Introverted Feeling: IFと略)タイプ、外向感覚(Extraverted Sensation: ESと略)タイプ、内向感覚(Introverted Sensation: ISと略)タイプ、外向直観(Extraverted Intuition: ENと略)タイプ、内向直観(Introverted Intuition: INと略)タイプができあがる。

これまで、とりわけ北米を中心とした国外において、MBTI (Myers-Briggs Type Indicator)を用いたタイプ論の実証研究が蓄積されている(Myers, McCaulley, Quenk & Hammer, 1998)。非臨床群を対象とした調査ではMBTIの内向得点と各種の抑うつ尺度との間に正の相関が認められている(Myers & McCaulley, 1985)。また、単極性うつ病患者を対象とした調査からは、臨床群は対照群よりも一般態度では内向タイプ、心的機能では感情タイプと感覚タイプの出現が対照群よりも有意に多くみられること、またMBTIの16タイプに分類するとISFP(内向-感覚-感情-知覚)が全体の29%、ISFJ(内向-感覚-感情-判断)が15%、INFP(内向-直観-感情-知覚)が15%を占めることからIFタイプの割合が高く、対照群と比べても多いことが報告されている(Janowsky, Hong & Morder, 1998)。別の抑うつ患者を対象とした調査結果でもISFJとISFPの割合が高いことが報告され(Bisbee, Mullary & Osmond, 1982)、IFタイプを抑うつ発症の脆弱性要因と仮定してもおかしくない<sup>1)</sup>と述べられている。

一方、国内では非臨床群の大学生を対象とした調査から、心理学的タイプの測定尺度(Jung Psychological Types Scale、以下JPTS)の「外向-内向」はNEO-FFIの神経症傾向(neuroticism)との間に負の関連を示し(佐藤, 2005)、心理学的タイプに類型化するとIFタイプはEF、ENタイプよりも神経症傾向を高く示した(佐藤, 2007)。もっとも、この5因子モデルの神経症傾向は一般的なパーソナリティ

次元を指しており、臨床症状としての神経症傾向を検討する必要がある。

ここまでは実証研究の知見をみてきたが、Jung 理論から言えば、それぞれの心理学的タイプは価値中立的な意味をもつので、何らかの心理学的タイプに該当すること自体が不適応や精神病理を意味するわけではない。そうではなく、自我意識上で優越機能が著しく優勢になった場合、無意識下の劣等機能がその偏りを補償しようとして、心理的問題や精神病理が生じると想定されている(Jung, 1921; 河合, 1967)。それゆえ、どの心理学的タイプに該当するかが問題ではなく、自我意識と無意識との関係が問題となるのである。

たとえば内向タイプは主体要因を優先するため周囲には理解されにくい、主体要因も客体要因と同じく現実的な基盤に根付いているので、それによって心的葛藤が高まることにはならず、なかには主観的現実根付いていることが豊かな内的充足を育むこともある。それとは逆に、周囲に理解されやすい外向タイプであっても、客体要因を重視して主体要因を軽視するため、周囲に向けて過剰適応的に振舞いすぎると内面が空虚となり、自己拡散や方向喪失に陥ってしまうこともある。

こうした理論的、臨床的な前提を考えると、心理学的タイプを実証的に検討する際はその知見をどのように位置づけるかが重要となる。これまで理論的、臨床的に指摘されていた点を客観化して全体的傾向として把握することは、学生対応や学生相談の入り口で学生や来談者を理解しながら関係を作る際に役立つ資料となりうる。また、不適応や精神的な健康のリスク要因につながりやすいパーソナリティ特性がわかれば、学生へのメンタルヘルスの予防や心理教育に生かすことも期待できる。

以上の問題意識から、本稿は大学生の心理学的タイプと適応感、精神的健康との関連を検討する。心理学的タイプのなかでも、抑うつ脆弱性要因や神経症傾向の高さが指摘されている IF タイプと、同じ感情タイプでありながら脆弱性要因は指摘されず神経症傾向も低い EF タイプに焦点を当てる。

Jung 理論によると、EF タイプは自分の感情よりも、その場にふさわしい、客体の価値に合った判断をする。こうした外界に適応的な判断機能によって、一般に EF タイプは、適切な人間関係を結び、容易く外界に適応する<sup>2</sup>。一方、IF タイプは主体のもつ価値や評価に方向づけられている。たとえば IF タイプが「美しい」とか「良い」と感じる場合、周囲の価値は考慮に入れず、主観的な価値から判断を行う。こうした判断機能によって客体の価値を受入れないために外界への適応に困難を覚えることになる<sup>3</sup>。このように考えると、EF タイプは環境や周囲との一致を感じやすく、精神健康状態も保ちやすいと予想されるのに対し、IF タイプは環境や周囲との一致を感じにくく、精神健康状態も保ちにくいと予想される。

なお、大学生の適応感の測定については、近年多様な価値観をもつ学生が多数存在することから、大学生活に対するさまざまな主観的意味づけを考慮することが必要である。そこで適応感を「個人が環境と適合していると意識すること」(大久保, 2005)と定義し、主観的適応に焦点を当てることとする。

また、タイプ論の点からは大学生女子は男子に比べて感情機能が有意に高いことから(佐藤, 2005)、性差によって心的機能のあり方が異なる。また、同じ大学生女子であっても、男女共学と女子のみでは大学生活に違いがあると予想される。そこで、本稿は女子大学生に焦点を当てて検討する。

<sup>1</sup> ここで疑問に浮かぶのは、この結果は抑うつの背景にある特性なのか、それとも抑うつの結果として生じた状態なのかといった点である。Janowsky (2001)によると、多くの研究結果から単極性うつ病が寛解しても患者の向性の変化はみられなかったこと、また内向タイプや感情タイプの比率は非臨床群では男女差が見られるのに対し、抑うつ患者では男女関係なく内向タイプや感情タイプの割合が高かったこと、さらに双生児研究の知見から向性の遺伝一致率は高いことから、パーソナリティが感情障害の存在や予後をかなりの程度決定すると考えて差し支えないと結論づけている。

<sup>2</sup> たとえば、この感情なくして気持ちの良いなごやかな交際など考えられない(Jung, 1921)、環境に対する「潤滑油」ともいえる調整役ぶりを発揮し、会合やパーティには欠かせない人物である(河合, 1967)。

<sup>3</sup> 「止水は深し」と表されるように、外界に示さない深い感情をもっているが「たいてい冷ややかで控え身に見えるため、表面的に判断すると彼にはいかなる感情もないように見える。しかしそれは根本的に間違っている、というのは彼の感情は外に向かうのではなく、内に向かうからである」(Jung, 1921, 邦訳 p419)。



(佐藤)

## 方 法

### 質問紙

a) JPTS (佐藤, 2005) 一般態度の「外向-内向」(Extraversion-Introversion; 以下 E-I)、判断機能の「思考-感情」(Thinking-Feeling; 以下 T-F)、知覚機能の「感覚-直観」(Sensation-Intuition; 以下 S-N)という3下位尺度に9項目対ずつ、計27項目対から構成されている。JPTSの特徴は、Jung 派分析家2名による内容妥当性(佐藤, 2005)や、心理学的タイプの類型化による併存妥当性(Sato, 2017)など、信頼性ならびに妥当性が確認されている。回答形式は、Jung の対極性の概念に基づき、項目対(a, b)について、「aにまったく当てはまる」から「bにまったく当てはまる」までの双極型の7件法である。得点化は、EからI、TからF、SからNの方向に7点から1点を与える。たとえば、「E-I」得点が高くなるほど外向的で、低くなるほど内向的であることを示す。

b) 日本版精神健康調査票28項目短縮版(The General Health Questionnaire 28:GHQ28と略) 神経症者の症状把握、評価、発見のためのスクリーニング検査であり、健常の範囲から変化した症状の発見に主眼が置かれている。「身体的症状」、「不安と不眠」、「社会活動障害」、「うつ傾向」の各7項目、計28項目からなる。得点化はGoldbergのGHQ法に則り、回答が「あった」と「たびたびあった」は1点、「全くなかった」と「あまりなかった」は0点を与える。得点が高くなるほど精神的健康が低い状態を示す。

c) 青年用適応感尺度(大久保, 2005) 「個人が環境と適合していると意識していること」を主観的適合感とし、個人と環境が適合しているときの認知や感情に焦点を当てている。「居心地の良さの感覚」10項目、「被信頼・受容感」6項目、「課題・目的の存在」7項目、「拒絶感の無さ」6項目である。回答形式は、「全く当てはまらない」から「かなり当てはまる」までの5件法である。

### 調査の対象と手続き

調査協力者は、JPTSとGHQ28を私立文系の大学学部生および短期大学部生240名(女性。平均年齢19.1歳、 $SD=0.91$ 。1回生146名、2回生94名)、JPTSと青年用適応感尺度を大学生256名(女性。平均年齢19.2歳、 $SD=0.87$ 。1回生113名、2回生143名)であった(うち153名がすべての尺度を回答)。必要な倫理的手続きを行ったうえで、集団法により実施した。

## 結 果

JPTS、GHQ28、青年用適応感尺度の記述統計量を求めた(Table 1参照)。JPTSの下位尺度ならびに青年用適応感尺度の $\alpha$ 係数はいずれも0.80以上であった。GHQ28の $\alpha$ 係数は身体的症状が0.70を下回ったが、ほかは0.70以上であった。中川・大坊(1985)によるとGHQ28の区分(臨界)点は合計5/6点だが、大学生を主とする青年期では合計得点の平均値が高くなる(6.6~7.8点)。それと比べると本結果のGHQ合計平均値はやや高かった。

なお、学年別のGHQ28合計の平均値( $SD$ )は、1回生7.87(5.82)、2回生9.17(5.80)であり、青年用適応感尺度合計の平均値( $SD$ )は、1回生88.11(16.55)、2回生88.85(16.00)であった。それぞれ学年別で $t$ 検定を行ったが、有意差は認められなかった( $t(238)=1.57$ ,  $t(254)=0.36$ ; ともに  $n.s.$ )。

Table 1

JPTS, GHQ28、青年用適応感尺度の項目数、平均値、標準偏差、 $\alpha$ 係数						
尺度名	項目数	最小値	最大値	平均	$SD$	$\alpha$ 係数
JPTS <sup>a)</sup>						
E-I	9	9	57	29.07	9.61	0.83
T-F	9	9	58	26.71	9.01	0.85
S-N	9	9	62	34.94	8.67	0.81
GHQ28 <sup>a)</sup>						

身体的症状	7	0	7	2.86	1.79	0.64
不安と不眠	7	0	7	2.87	2.00	0.72
社会活動障害	7	0	7	1.43	1.67	0.70
うつ傾向	7	0	7	1.28	1.88	0.84
合計	28	0	26	8.44	5.83	0.92
青年用適応感尺度 <sup>b)</sup>						
居心地の良さ	9	11	45	32.85	6.94	0.89
被信頼感・受容感	7	11	35	26.00	5.31	0.88
課題・目的の存在	6	6	30	17.55	4.61	0.84
拒絶感の無さ	6	3	24	14.27	4.27	0.81
合計	28	34	129	90.66	16.40	0.92

<sup>a)</sup> N=256、<sup>b)</sup> N=240

JPTS の下位尺度と GHQ28 合計の相関係数を求めたところ、JPTS の「E-I」と GHQ28 の「合計」との間にやや弱い有意な負の相関( $r=-.190$ ;  $p<.01$ )がみられたが、それ以外は無相関であった。次に、JPTS の下位尺度と青年用適応感尺度の相関係数を求めたところ、JPTS の E-I と青年用適応感尺度の「居心地の良さの感覚」、「被信頼・受容感」、「合計」との間に弱い程度の正の相関(それぞれ、 $r=.309$ ,  $r=.353$ ,  $r=.309$ ; すべて  $p<.001$ )、JPTS の「T-F」と青年用適応感尺度の「居心地の良さの感覚」との間に弱い程度の負の相関が認められた( $r=-.243$ ;  $p<.01$ )。

次に、調査協力者を 8 つの心理学的タイプに判別した。まず、E-I、T-F、S-N の下位尺度得点から E/I タイプ、T/F タイプ、S/N タイプの類型化を行った。それぞれの下位尺度得点は連続体であるため、理論上の中央値(項目ごとに 4 点、下位尺度合計では 36 点)を基準とし、E-I 得点、T-F 得点および S-N 得点が 37 点以上ならそれぞれ E、T、S タイプ、35 点以下なら I、F、N タイプ、36 点なら判別不可とした(Sato, 2017)<sup>4</sup>。次に、一般態度と心的機能を組み合わせた 8 つの心理学的タイプに判別するため、T-F と S-N について中点からの絶対値得点をそれぞれ求め、得点の高い機能を優越機能、低い機能を補助機能とし、同点であれば判別不可とした。そして、一般態度と優越機能を組み合わせて 8 つの心理学的タイプに分類した。

その結果、JPTS と GHQ28 の回答者は、判別不可となった人を除くと、ET タイプ 5 名、EF タイプ 38 名、ES タイプ 5 名、EN タイプ 8 名、IT タイプ 7 名、IF タイプ 116 名、IS タイプ 28 名、IN タイプ 21 名であった。JPTS と主観的適応感尺度の回答者は、判別不可となった人を除き、ET タイプ 5 名、EF タイプ 37 名、ES タイプ 3 名、EN タイプ 13 名、IT タイプ 7 名、IF タイプ 124 名、IS タイプ 33 名、IN タイプ 20 名であった。ET タイプ、ES タイプ、IT タイプの人数はどちらも 10 名未満であったため、今回の分析対象から省いた。

心理学的タイプを要因とする GHQ28 得点の分散分析を行った(Table 2 参照)。その結果、GHQ28 の「不安と不眠」、「うつ傾向」に心理学的タイプの主効果が認められた( $F(4,206)=3.09$ ,  $F(4,206)=2.58$ ; ともに  $p<.05$ )。等分散の場合は Tukey の HSD 法、等分散でない場合は Games-Howell 法による多重比較を行った結果、IF タイプは EF タイプより「不安と不眠」、「うつ傾向」が有意に高かった。

心理学的タイプを要因とする青年用適応感尺度得点の分散分析を行った(Table 2 参照)。その結果、「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼・受容感」、「合計」において心理学的タイプの有意な主効果が認められた( $F(4,222)=6.45$ ,  $p<.001$ ;  $F(4,222)=3.45$ ,  $p<.01$ ;  $F(4,222)=5.575$ ,  $p<.001$ ,  $F(4,222)=6.45$ ,  $p<.001$ )。多重比較の結果、「居心地の良さの感覚」については EF タイプが IF、IS タイプより高く、EN タイプは IS タイプよりも高かった。「課題・目的の存在」については EF、EN タイプが IS タイプより高かった。「被信頼・受容感」と「合計」については EF、EN タイプが IF、IS より高かった。

<sup>4</sup> 理論上の中央値を心理学的タイプの判別基準としたのは、MBTI や GW/JTS (Wheelwright, Wheelwright & Buehler, 1964) と同様である。

Table 2  
 心理学的タイプを要因とする GHQ28、青年用適応感尺度得点の分散分析結果

尺度名		心理学的タイプ					分散分析	
		EF <sup>a)</sup>	EN <sup>b)</sup>	IF <sup>c)</sup>	IS <sup>d)</sup>	IN <sup>e)</sup>	F 値	下位検定結果
<b>GHQ28</b>								
身体的症状	平均	2.68	3.00	3.09	2.86	3.14	0.44	
	SD	1.71	2.45	1.77	1.78	1.82		
不安と不眠	平均	2.05	3.00	3.33	2.82	2.90	3.09 *	IF>EF
	SD	1.80	2.51	1.94	2.16	1.84		
社会活動障害	平均	0.95	2.13	1.49	2.00	1.57	1.90	
	SD	1.64	2.80	1.51	1.98	1.86		
うつ傾向	平均	0.53	1.50	1.53	1.18	2.00	2.58 *	IF>EF
	SD	1.31	2.51	2.03	1.91	2.26		
合計	平均	6.21	9.63	9.43	8.86	9.62	2.36 †	
	SD	5.09	9.20	5.46	6.35	6.79		
<b>青年用適応感尺度</b>								
居心地の良さ	平均	36.57	36.31	31.73	29.82	32.25	6.44 ***	EF>IF, IS EN>IS
	SD	6.68	6.20	6.39	6.55	7.67		
課題・目的の存在	平均	26.81	27.92	24.97	23.94	27.15	3.45 **	EF, EN>IS
	SD	4.73	4.70	4.57	4.40	6.21		
被信頼・受容感	平均	19.16	20.54	16.19	16.18	16.90	5.57 ***	EF, EN>IF, IS
	SD	4.57	3.93	4.25	4.28	5.76		
劣等感の無さ	平均	15.30	14.54	13.27	14.88	14.80	2.39 †	
	SD	4.20	2.99	4.17	4.48	4.79		
合計	平均	97.84	99.31	86.16	84.82	91.10	6.05 ***	EF, EN>IF, IS
	SD	17.14	13.49	14.16	16.21	21.32		

†  $p<.10$ , \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ , \*\*\* $p<.001$

a) JPTS と GHQ28 は  $N=38$ , JPTS と 青年用適応感尺度は  $N=37$

b) JPTS と GHQ28 は  $N=8$ , JPTS と 青年用適応感尺度は  $N=13$

c) JPTS と GHQ28 は  $N=116$ , JPTS と 青年用適応感尺度は  $N=124$

d) JPTS と GHQ28 は  $N=28$ , JPTS と 青年用適応感尺度は  $N=33$

e) JPTS と GHQ28 は  $N=21$ , JPTS と 青年用適応感尺度は  $N=20$

## 考 察

心理学的タイプ別に精神的健康を検討したところ、心理学的タイプによって精神健康状態は異なり、IF タイプは EF タイプよりも不安と不眠、うつ傾向を高く示した。また、心理学的タイプ別に主観的適応感を検討したところ、EF や EN タイプは IF や IS タイプよりも環境や周囲と適合する感覚を高く示した。総じて言えば、IF タイプは精神的健康や主観的適応感が比較的不全な状態であるのに対し、EF タイプは比較的良好な状態にあると言える。

こうした結果から、IF タイプは他のタイプよりも大学生活への不適応や精神的不健康のリスク要因につながりやすいことが示唆された。これは仮説をおおむね支持しており、臨床群を対象とした国外の調査結果報告 (Janowsky, 2001)、あるいは一般性格傾向としての神経症傾向の結果 (佐藤, 2007) とも一致していた。一般態度に心的機能を組み合わせた心理学的タイプで検討したことで、より明確な特徴が得られたと言える。

もっとも、ここで IF タイプをたんなる脆弱なパーソナリティであると結論づけるわけではない。ただし、感情機能が主体の価値に方向付けられることで主体の内面に感情が沈み込み、さまざまな気持ちを内側にためやすいことが不適応や不健康のリスク要因につながりやすいと理解することは可能であろう。一方、共感性との関連結果から、IF タイプは他者理解の際に他者の感情を共有しつつ自他の個別性を認識しようとする共感スタイルをもつことが示唆されており(佐藤, 2010)、対人感受性の豊かさを合わせもっているがゆえに対人関係に葛藤を抱えやすくなる可能性も考えられる。

また、EF タイプが環境への適応や精神的健康で良好状態にあった。これも仮説をおおむね支持しており、従来の理論的知見を明確にしたと言える。GHQ28 の大学生の平均値範囲(6.6 点～7.8 点)(中川・大坊, 1985)と比べると、本結果のなかでその範囲内にあるのは EF タイプのみであった。感情機能が他者の価値に方向付けられることは周囲との一致を感じやすく、また感情が外に向かうことはさまざまな気持ちを解放することにつながり精神健康が良好に保たれるのかもしれない。EF タイプは 5 因子性格モデルの外向性(extraversion)や調和性(agreeableness)が比較的高いことから(佐藤, 2007)、活動性の高さや対人関係の円滑さは適合感とも結びつく。一方、共感性との関連結果から、EF タイプは他者理解の際に他者の感情を共有するものの個別性の認識の弱い共感スタイルをもつことが示唆されている(佐藤, 2010)。これは逆に言えば個別性の認識が弱いゆえに対人葛藤を抱きにくくなっているとも考えられる。

今回新たに見出されたのは、IS タイプは IF タイプと同じく適応感が低い状態にあったことである。IS タイプは五感の感覚機能が内面に向かうことを意味し、IN タイプと同じく主観的知覚に方向づけられる。外界からの刺激そのものよりも、それをどう受け止めたのかという内的な感受性を頼りとしている。それゆえ、その行動は外から見ると限りなく不可解に見える場合が多いという(河合, 1967)<sup>5</sup>。こうしたことから、IS タイプの主観的適応感が低かったのは、たんなる脆弱性というよりも鋭敏な内的感性あるいは感覚的感受性に方向づけられているせいで、刺激の多い大学生活は疲れ果ててしまうか、あるいは自らの感性に合う興味や関心を持ちづらいために環境との一致を抱きにくいのかかもしれない。本結果で「課題・目的の存在」が低かったのも、たんに課題意識が低いというより内的な感受性を頼りとするせいかもしれない。

また、EN タイプは EF タイプとともに主観的適応感を高く示した。EN タイプは外的なことがらに対してすべての人が認めている現実的な価値ではなく可能性を求めて行動すると言われる(河合, 1967)。事実よりも可能性の知覚を追求する直観機能が外界に向かうため、未知なる環境にも臆せずに入り込み、それだけ適合を抱きやすくなったと考えられる。また、EN タイプは 5 因子性格モデルの神経症傾向が比較的低く、誠実性(conscientiousness)が高いことから(佐藤, 2007)、従来理論的に想定されていたパーソナリティ像よりも安定性や統制感を備えていることが示唆される。

今回、類型別にみた実証的な傾向を把握できたことにより、大学生女子の心理支援、あるいはメンタルヘルスの心理教育の際、有益な基礎知見となることが示唆される。とりわけ IF タイプは、精神健康や適応が低い状態であるものの、大学生女子に限らず他の心理学的タイプのなかでもっとも該当者が多いので(佐藤, 2007, 2010)、ある意味でタイプ論の平凡反応とも呼べる。それゆえ、先にも述べたように一面的な理解に陥らないよう、知見の伝え方には注意が必要である。

なお、IF タイプの該当者が多くなることへの対応として、先の MBTI の知見でも単極性うつ病患者に IFS の割合が高いことから(Janowsky *et al.*, 1998)、補助機能の知覚機能と組み合わせて IFS (Introverted feeling-sensation)と IFN (Introverted feeling-intuition)に分け、補助機能の違いでどのような特徴がみられるか検討することも考えられる。

<sup>5</sup> 「彼らの目は豊かな習慣的な出来事に釘づけになっている。内で生じることがあまりに魅力的で、尽きることのない刺激を送ってくるため、それについて周りに伝えることが、自分自身の中ではそれと一つになるほど体験をしているのに、決まってそのごく一部しか含んでいないことに全然気づかないのである」(Jung, 1921, 邦訳 p435)。



(佐藤)

本研究の限界としては次の3点がある。第1に、今回はET、ES、ITタイプの該当者が少なく検討できなかったため、心理学的タイプの特徴を網羅して明確にできなかった点である。第2に、大学生女子のみを対象としたため、感情タイプの割合が多くなった可能性がある。第3に、本知見は非臨床群を対象としたものであるため、臨床場面へ一般化するには慎重であるべきである。

## 引用文献

- Bisbee, C. Mullary, R. & Osmond, H. (1982). Type and psychiatric illness. *Journal of Psychological Type*, 4, 49-67.
- Heerlein, A., Richiter, P., Gonzalez, M. & Santander, J. (1998). Personality patterns and outcome in depressive and bipolar disorders. *Psychopathology*, 31, 15-22.
- 平野 優子 (2005). 大学低学年生におけるデイリー・ハッスルと入学前後のストレスフルで重大な出来事との関連 学校保健研究, 47, 201-208
- Janowsky, D. (2001). Introversion and Extroversion: Implications for depression and suicidality. *Current Psychiatry Reports*, 3, 444-450.
- Janowsky, D., Hong, L. & Morter, S. (1998). Underlying personality characteristics related to affective disorders and suicidality. In *Neurobiology of Depression and Related Disorders*. (Eds. Nomura, J.) Mie, Japan: Mie Press, pp.9-29.
- Jung, C. G. (1921). *Psychologische Typen*. Zürich: Rascher Verlag. 林道義(訳) (1987). タイプ論 みすず書房
- 河合 隼雄 (1967). ユング心理学入門 培風館
- 河合 隼雄 (1986). 心理療法論考 新曜社
- 北村 晴朗 (1965). 適応の心理 誠信書房
- Myers, I. & McCaulley, M. (1985). *A guide to the development and use of the Myers-Briggs Type Indicator*. Palo Alto: Consulting Psychological Press.
- Myers, I. B., McCaulley, M. H., Quenk, N. L. & Hammer, A. L. (1998). *MBTI Manual (third edition) -A guide to the development and use of the Myers-Briggs Type Indicator*. Consulting Psychologist Press.
- 中川 泰彬・大坊 郁夫 (1985). 精神健康調査票手引 日本版 GHQ 日本文化科学社
- 夏野 良治 (1998). FFPQ と健康度(GHQ)との関係 辻 平治郎(編) 5 因子性格検査の理論と実際 ころろをはかる 5 つのものさし 北大路書房 pp.173-180.
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因: 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307 - 319.
- 太田 伸幸・甲村 和三・児嶋 文寿 (2008). 大学適応感の変化に関する一考察—教職課程履修生を対象とした縦断調査より 愛知工業大学研究報告, 43, 1-10.
- 小柳 晴生 (2014). 大学生の不登校をめぐって 精神医学, 20, 63-72.
- 佐藤 淳一 (2005). Jung の心理学的タイプ測定尺度(JPTS)の作成 心理学研究, 76, 203-210.
- 佐藤 淳一 (2007). Jung のタイプ論に関する基礎的研究(博士論文) 甲南大学大学院人文科学研究科提出
- 佐藤 淳一 (2010). 共感性と感情機能 -Jung のタイプ論による検討 上越教育大学研究紀要, 29, 159-167.
- Sato, J. (2017). Additional report about the validity of the Jung Psychological Types Scale. *Online Journal of Japanese Clinical Psychology*, 4, 1-7.
- 谷島 弘仁 (2005). 大学生における大学への適応に関する検討 文教大学人間科学部 人間科学研究, 27, 19-27.
- Wheelwright, J. B., Wheelwright, J. H., Buehler, J. A. (1964). *Jungian Type Survey: The Gray -Wheelwright Test manual (16th revision)*. Society of Jungian Analysis of Northern California.

受理日 2019年11月26日